



私の
フィールド
ワーク

奥出雲のことばから 「日本祖語」の姿を探る 伝統方言の記述と日本語の歴史

平子達也 ひらこたつや / 南山大学

松本清張『砂の器』で有名な島根・奥出雲。
偶然の出会いから日本語の歴史を解く鍵を得た矢先、
当地の方言が衰退していく様を目の当たりにする。
伝統方言の記述が急がれる理由を、
言語史研究の観点から考える。

「日本祖語」の姿を求めて

日本の言語学の礎を築いたとされる服部四郎(1908-95)は、日本語の起源の解明を目指すとともに、今ある多様な日本語の方言が、どのように成立したのかを明らかにしようとした。服部は、日本語の方言が多様であるのは、それらの共通の祖先にあたる言語があり、その共通の祖先の言語からそれぞれが別々の方向に変化した結果であると考えた。その諸方言の共通の祖先にあたる言語のことを、服部は「日本祖語」と呼んだ。

服部は、日本祖語の姿を明らかにするには、琉球列島の諸方言を中心とした日本語諸方言の精密な調査研究が必要であり、それが急を要するものであることを40年以上も前の論文で述べている。今世紀に入って、琉球諸方言の研究が盛んになったが、



それ以外の方言の研究は未だ不十分とされる。

私は、当初、文献資料を使った日本語史の研究に従事していた。方言調査を行うようになったのは、大学院の博士課程進学後のことである。きっかけは、日本語の歴史や琉球方言の研究をしていたフランス人の友人との出会いだった。文献資料だけでは、文献以前の日本語の姿に迫るのは難しい。しかし、諸方言の中には文献以前の日本語、つまり、日本祖語の姿に迫る手がかりが残されている。そんなふうな方言研究の意義と魅力を語る彼の勧めと、指導教員の先生の後押しがあり、私は方言の調査研究に取り組むことになった。

島根・奥出雲というところ

島根県は、元々西の石見国、東の出雲国、そして海上に浮かぶ島々からなる隠岐国の3つの国に分かれていた。その中の旧出雲国に相当する出雲地域は、古くから神話の舞台となり、また、縁結びの神様として知られる出雲大社があることで有名である。その出雲大社がある出雲市から40kmほど南東に位置する奥出雲町で、私は主に調査をしている。

左：奥出雲町仁多での調査風景。本文中に出てくるおばあさんと筆者（調査協力者撮影）。
下：出雲では御茶請けに漬物や煮物を出されることが多い。



『砂の器』の舞台となったことを記念する石碑。

調査地の最寄駅である出雲八代駅。『砂の器』が初めて映画化された時は、「亀嵩駅」として撮影現場となった。

出雲空港から調査地までは車なら1時間もかからないが、車の運転ができない私は、空港からバスと電車を乗り継いで向かう（親切な方が車で空港まで迎えに来てくださることもあるが）。空港から調査地まで待ち時間も含めて約3時間。途中、JR山陰本線の宍道駅から木次線に乗り換え、そこから60分ほどで、調査地最寄の出雲八代駅に到着である。

「偶然的出会い」その1～人との出会い～

初めて奥出雲の方言を調査したのは、大学院生だった2012年3月であるが、その時に、非常に幸運な出会いに恵まれた。

それは、2泊3日の調査の最終日の朝、宿泊施設のチェックアウトをしていた時のことである。受付の奥にいらっしゃった施設の責任者の方が、私に対して「何をしに奥出雲に来たのか？」と尋ねてこられた（若い男が一人で連泊というのが珍しかったのだろうか）。正直に「方言調査をしに来たのです」と答えた私に、その方は、「ならば、私の母を紹介してあげよう」とおっしゃった。

聞けば、その方のお母様は大正最後のお生まれで、地元でずっと住んでいらっしゃるという。以来、そのおばあさんには、何度も何度も調査にご協力いただき、たくさんのお話を教えていただいている。

「偶然的出会い」その2～不思議な発音との出会い～

初めて出雲に行ってから8年経った今、出雲方言の音声や文法など、あらゆることを明らかにしようと調査を進めている。最近は、他大学の先生方とチームで調査を行うこともある。

ある時、奥出雲での調査を終えて移動する車中で、一緒に調査をした先生が「これまでに出会ったことのない不思議な

音と出会った」とおっしゃった。その先生によれば、動詞活用の調査をしていたときに、「雨が降る」の「降る」が「ファー」と発音されるのを確認したという。「フル」を「ファー」という……この不思議な現象に、私は非常に興味を持ったが、一方で、動詞活用を含めた文法現象全体の調査をしていたからこそ、この形式に出会えたのだとも思った。音のことを1つ研究するにしても、その言語の全体像を把握することが大切だと思い知らされた出来事である。

また、名詞のアクセントの調査をしていた時、話者の方が『葉』という単語は、この辺りでは『クソー』と言う」とおっしゃった。他の方言では聞いたことがない形に驚いたが、上述の奥出雲のおばあさんに確認すると、やはり「クソー」と言うという。

アクセント調査では、多くの場合、文字で書かれた単語や文を、協力者の方に読み上げていただく。文字で書かれているので、どうしても母音や子音が標準語のようになってしまうことがある。先述の「クソー」という形を教えてくださいました方は、言葉に関する「勘」がとても鋭い方だったのだろう。以来、私は、アクセント調査の時にも、一々の単語の発音について慎重に確認するようになった。言語調査では当然のことなのだが、私自身にとってはとても大事な気づきであった。

「クソー」は日本祖語の名残??

出雲方言では、単語の途中で標準語の「リ」や「ル」に対応する音がしばしば脱落する（「踊り」は「オドー」など）。そして、



縁結びの神様で有名な出雲大社。出雲大社がある出雲市で調査することもある。

標準語のウ段音がオ段音で発音されることもよくある（「麦」は「モギ」など）。当初私は、先の「クソー」という形も、そのような「訛り」の1つとして説明できると思っていた。

しかし、標準語と奥出雲方言の間の「音の対応」を整理したところ、「クソー」という形が実はそのような「訛り」としては説明できないことが分かった。上述の通り、標準語のウ段音が、奥出雲方言でオ段音となることは確かによくある。しかし、標準語の「ス」に当たるものが「ソ」で発音されることは、その時点では「クソー」を除いて他になかったのである。

行き着いた結論は、「クソー」という形が日本祖語の「名残」なのではないか、ということである。実は、琉球方言から得られた証拠によれば、「薬」を意味する日本祖語の形は「クソリ」だと考えられる。この「クソリ」という形が、「単語の途中で標準語の『リ』や『ル』に対応する音が脱落する」という出雲でよくある変化を経験したとすれば、先の「クソー」という形の存在は無理なく説明される。一方、標準語の「クスリ」は、日本祖語の形が別の方向に「訛った」ものと言えるだろう。

「クソリ」という形は『万葉集』など文献資料の中には現れない。文献資料だけでは遡ることができない文献以前の日本語の姿に、方言の調査研究から迫ることができたのである。

期待と危機感

上述の研究を通して、奥出雲方言の調査研究が、日本祖語の姿に迫るための重要な鍵となると確信した私は、現在、そのような視点から調査を進めている。つまり、まず、他方言にある証拠から日本祖語の形を推定し、それが奥出雲方言の中で起こった変化を経たとすれば、どのような形になるかを予測する。そして、その形が実際に使われているか否かを確かめながら調査するのである。上述のおばあさんから教えていただいたところでは、他にもいくつか日本祖語の「名残」と思しき形式がありそうである。調査をしていると、少しずつ日本祖語の姿に迫っているような気がして、ある種の高揚感を覚えることもある。

しかし、そのような今後の研究への期待感がある一方で、

和菓子ではなく、すべてお漬物。「八ツ橋」のように見えるのは、カブの漬物で梅肉を包んだもの。調査協力者の方がご用意くださった。



出雲市駅から木次線に直接入るトロッコ列車「おろち」。

危機感を抱くこともある。

同じ奥出雲町内で別の方に調査した時のことである。「『馬』を何と言いますか」という質問に対して、その方は「『馬』は『ウマ』だ」とお答えになった。そこで、「『オマ』のようにはいませんか」と尋ねると、「うちの方言はそんなに訛っていない」と言われる。伝統的な出雲方言では、単語の頭に出てくる標準語の「ウ」は「オ」と発音されるはずなのだが、いくら調査をしても、それは確認されなかった。もちろん調査による緊張の影響なども考えられるが、このようなことは1度だけではなかった。伝統的な出雲方言が徐々に失われていっているのを感じている。

コロナ禍の中で……

伝統的な出雲方言の調査研究は遠くない未来により難しくなる。そうなる前に調査を急がなければ……そう思っていた矢先に、新型コロナウイルスの影響で現地調査ができなくなった。また、最近になって、親しくしていただいた協力者の方の訃報を受けとり、強い悲しみとともに焦りを感じたりもした。

全国の多くの方言が同じような状況にある。なすべきことの多さに比べて、残された時間はあまりにも短いように感じる。しかし、今は、いつかまた調査が出来る時が来ることを願いつつ、少しずつでも出来ることをやってみていくしかない。